

司会 司会をさせていただきます、(特活)あしやNPOセンター理事の林と申します。よろしくお願いいたします。本日は、芦屋の未来をつくる会議ということで皆様方に集まってもらっています。芦屋の未来、それはどんな未来なのか、それは、一人一人の気持ち、考えにかかっているのかなと思います。芦屋で活躍されたり、芦屋と縁のある方々をパネリストとして呼びしています。パネリストの方々のご意見を参考に刺激を受け、自分たちでどんな芦屋の未来を作りたいのかを考えてもらおうというのが趣旨です。芦屋の未来を考えるヒントになるようなパネルディスカッションをしていただきます。では登壇者の方々をご紹介します。まずファシリテーターの山崎さんです。

山崎 山崎です。どうぞよろしくお願いいたします。

司会 三宅さんです。

三宅 みなさん、よろしくお願いいたします。

司会 中田さんです。

中田 ギイチギャラリーの中田です。よろしくお願いいたします。

司会 大森さんです

大森 (目礼)

司会 それでは、山崎さんに進行をお願いいたします。マイクをお渡しいたします。

山崎 改めましておはようございます。どうぞよろしくお願いいたします。山崎と申しまして、芦屋在住です。コミュニティデザインという仕事をやっておりまして、まちづくりのような仕事と説明しています。元々デザイナーです。なので、こういう建物を設計したりとか、庭とか公園を設計したりとか、そういう仕事をやっていたんですけども「日本の人口が減っているのに建物を建てなければあかんのかい」ということがちょっと疑問になってきまして、デザイナーとして人と人をつないでいくという仕事をしてみようかなということで、13、4年前に大阪に「studio-L」という事務所をつくりました。全国各地1年間に60地域と決め、ご依頼のあった地域でまちづくりをしたりしています。島根県隠岐郡海士町で7年くらいの付き合いしていたプロジェクトが、いろんなところで評価をしていただくことになりまして、今までに250ぐらいの地域にお邪魔して、これからをどう考えていくのか、そのため

には市民に何ができるのか、そういう話し合いをしてきました。こういうワークショップっていう方法は、ここ20年くらいこの国ではやっていますけれども、これやったことあるよっていう方どれくらいいます？（挙手）わかりました、半分弱かな、4割くらいの方ですね、これはちょっといいですね、初めての方もいらっしゃるんですね。それ嬉しいな、だいたいどこ行っても人気ないんですよ、ワークショップって。またそれかという顔されるんですね。入ってくると、このようにテーブルの周りに6人くらい座らされてね、その上に模造紙が置いてあって、付箋とか出てくるわけですよ。7.5センチ角のやつね。必ずそれが出でて「あ、それやらされるんや」それ入っているでしょ、だいたい入っているんですよ。この国はこの20年間、面白くないワークショップというのをさんざんやらされてきたんで、どこいってもワークショップアレルギーというのがあり、出てくるファシリテーターなる人がいるわけですよ、コミュニティデザイナーとかファシリテーターとかいう人がね。これが妙に笑顔で、「こんにちは」と始めるわけなんですよ。このノリについていけないわけですよ。それをやるのが僕の仕事なんですよ。日本どこ行っても人気ないですね。いろんなところでワークショップやらしてくださいと言って、そういう話し合いをやらしてもらおうのですが、よく考えたら自分が住んでる芦屋でそういう貢献ができてなかったかなと日々反省していたんです。コミュニティなんちゃらってと名のって、いろんなところでお世話になってるのに地元やれてないなあと思ったら、「あしや市民活動センターリードあしや」の方がたまたま連絡をしてくれまして、あなたの地元の芦屋でなんかやらへんかということだったので、もうすぐにお引き受けしました。その時にちょっとだけお願いしたんです。月に何日間かしか芦屋に帰ってこれないので、地元で友達がいないんだと、地元でなんかちょっと面白い事されてる方とか、芦屋に対して思いがある方を紹介してくれませんか。地元で何か活動されていたりとか、ご活躍されていて芦屋在住だという方々を紹介して欲しいと、わがままを申し上げましたら、「リードあしや」の方に色々調整をしていただいて、大森さん、中田さん、三宅さんの3人にこの場に来て頂くことができました。今日は、事前に打合せしているわけでもな

く、何か話すシナリオがあるわけでもなく、何も無いままに 1 時間、時間頂きましたので、ざっくばらんに、この芦屋、どんな街なんやろうということ、課題があるとしたらどんなことなんやろうと、未来はこんな街になったらいいなと話し合えたらと思います。では、自己紹介的に一言ずついただいて、そこから入りましょうか。大森さんからお願いいたします。

大森 10 歳から芦屋に 50 年以上居ます。宮川小学校、精道中学校と。特に 50 年居て、阪神大震災の時かな大変だったのは。もうそれからはノンビリ芦屋に浸っております。だから特にね、芦屋でそんなに騒がず、これでいいんじゃないかと…

山崎 これでもいいんじゃないかと。

大森 何を今さら「未来の芦屋をよくするか」という感じではありませんね。現状維持派です。

山崎 はい、いいですね大森さん。今、ホワイトボードに「何をいまさら」と書こうとしていましたよ。いい意見ですよ。昔から変わったところとかないですか。良くなってきたとか、悪くなったとか。

大森 芦屋の問題点は何だって、ちょっと聞いた時に、人が減ってきて寂しいと言うんですけど、僕なんかよく東京に行くんですけど、東京から芦屋に帰ってきた時、この人の少なさが本当にいいですよ。東京の人の多さというのは嫌で、東京から戻ってきて芦屋に降りた時、「わあ、こんな人の少ないところはいいな」と。だから、活気ある街とか、元気な街とかそういう方向で考えないほうがいいんじゃないかなと思うんです。

山崎 なるほどね。適度にまばらである感じかな。

大森 さっきのワークショップやって、どうやって活気ができるかとか元気になるかとお手本のように言われるんですけど、そういうことじゃないんじゃないかなというふうに思いますね。

山崎 活性化はどうです？

大森 いやあ、別に…そんなに活性しなくても…

山崎 はいはい

大森 静かに、宮沢賢治の「静かにただ笑っているだけで」という感じの街をどうやって維持していくかということですね。

山崎 なるほどね。地方創生って言葉はどうですか。

大森 ここは地方じゃないですよ。地方に入れてほしくないですね。

山崎 なるほど。今のお話いただいたこと、まさにそうだと思うんですね。活性化という言葉ってすごく使いやすいからすぐ使っちゃいますよね。活性化って何なんだろう、人々の心が気づいていくことだけでも活性化かもしれないけど、きっと政府はお金が儲かることだったり、経済が潤うことが活性化だと思うんですよ。じゃあお金儲かってどうするの、みたいな話のその先はあんまり議論されないですね。儲かったお金使って何するの、自分たちの人生を豊かにしたり、自分たちの人生をどう回していくのという話ではなくて、とりあえず数字として上がっていくところが活性化されたことになるようにすけれども、そういうことではないような気がします。大森さんが言われた通り、今日のワークショップはちょっと難しくなってきましたよ。賑わいとか活性化とか、創生とかですね、そういうこと目指さない話し合いにしようみたいなことにしたら、これ面白いかもしれないですね。

大森 賛成ですね。だいたいね経済で潤っている街じゃないでしょう。市民税で食っているような街じゃないですか。高い税金払っているんだから、ゆっくりと過ごさせていただいたほうが、本当にいいんじゃないかなというふうに思いますけどね。

山崎 市民税ね。お金持ちの方が多いんですよ。これ言ったら、俺、地元から弾き出されるかな。でも、言いたくなっちゃった。言いますね、東京とか、いろいろな地域に呼んでいただくんです。住まいは「芦屋」って言うんですね、ホントにごめんなさいね、ホントに。好きな方がおられたらホントに悪いんです。「ベンツが好きな人がいっぱい住んでる街ですよ」と言われるんですよ。僕、車持ってないんですけどね。別に家も持っていないし、借りているだけなんです。時計も持ってないですね。テレビもあまり見ないし、なんか芦屋の街が、アマゾンの奥地言ってもどこいっても「ベンツが好きな人が住んでいる街ですよ」と言われるのが嫌だなと思ったんですよ。

大森 震災の時の有名な話で、買い出しの時、ルイ・ヴィトンのカバンで来ていた人がいた。あれが何か誇らし気でね、街はボロボロなのに買い出しはルイ・ヴィトン！

山崎 あはははは それ誇らし気というか、笑われているんじゃないですか。

大森 これが芦屋だと思いましたね。どんなに災害を受けても気持ちだけは捨てないという。それしかないんでしょうね、家に。

山崎 鞆といったらヴィトンしかないんですよ、家に。

大森 そういう意味じゃ「ベンツの好きな街」そう言われるのは好きですよ。

山崎 そうなの好き？ 俺、嫌いだなあ。絶対嫌だと思った。いろんな意見があっただろうと思うんですけどね。ベンツの好きな人、この街から出ていけと言える立場でもないですしね。むしろ、それ言ったら嫌われちゃいますからね。なんかそういう特定のイメージがつきすぎると、先ほど大森さんが言ったようなことが起きるような気がするんですよ。要するに、ベンツとか好きな人たちがこの街に入ってきて、どうやったら金持ちになるのか、どうやったらベンツに乗れんのかみたいなことを考える、経済活性化みたいなところを目指すような人たちが、すごい増えるような街になっちゃったら、なんだかつまんねえなあというふうに思っていて。ああだいぶ嫌われているかな俺、大森さんは今すごく好かれていますね。

大森 いいえ。

山崎 震災の時にヴィトンを持っている、私は好きですよというのは芦屋受けしますよね。ちょっと中田さん話を聞かせてください。中田さん、どんなことされていて、今お住まいは？

中田 住まいは、隣のN市です。

山崎 ですよ。ただし、ここにある…

中田 そうですね、奥池にある「藤本義一の書齋」という、「藤本義一」という名前を知らない方もたぶんたくさんいらっしゃるんじゃないかなって思うんですけど、知らないなという方、正直に手を挙げてもらっていいですか。

山崎 割とたくさんいますね。

中田 そうですね。ええとですね、どんなおじさんかというと…

山崎 白髪のほら、ダンディーな…

中田 ギャラリーの宣伝にもなるんですけど、こんな白髪のおじさんなんですけど（写真を示す）一応作家でございまして、大阪の堺生まれで西宮に住んでいましたけれども、なぜか奥池が気に入って別荘を建てました。死後、そこに「藤本義一の書斎」というギャラリーを作ってるんです。それとか、浜風町の方に「浜風の家」を建てたんです。それも知らないなという方いらっしゃるんですか。（挙手）多いですよ。ゴミ処理場の隣にあるんですけども、震災の翌々年ですかね、震災孤児の人たちの何か拠り所になるところをということで施設を建てました。

私の芦屋のイメージなんですけど、先ほどおっしゃったようにベンツとかのイメージはあるんですけど、はっきり言って、芦屋を愛していらっしゃる方には大変申し訳ありませんが、すごく厳しい看板の条例とか、ちょっと変やな、変わっているな、目の付け所が、というイメージがあるんですね。もっと他にやることあるんじゃないの、と思うんですよ、はっきり言うて。（笑）すみません

山崎 結構言いますね。

中田 もっと大切なことがあるんじゃないかと、例えば、浜風の家は、県から借りている土地に建てていますので、もう役目も終わっただろうってことで来年の3月末に更地にして返せって言われます。しょうがないかなと思うんですけども、施設を愛してくださってる方が、いろいろやって下さってるので、心の底では無くしたくないって思ってるんですね。今は児童館みたいな役割を果たしてます。それから、その近くの浜風幼稚園の廃園になりましたよね。あれも署名がたくさん集まったのになぜか廃園になったというのもおかしな話やなというのとか、南芦屋浜の方に小学校を作るって決まっていたのに、それも急になくなっちゃったでしょ。それも新聞に載っていて、いったい何がしたいのかわからないなど。

山崎 わかりました。三宅さんいきましょうか。三宅さんはいろんなことに詳しい方で芦屋在住ですよ。芦屋のイメージのことを聞いてみたいと思いますが、いかがでしょ。

三宅 こんにちは。私は芦屋で生まれて、朝日ヶ丘小学校、山手中学校とずっと芦屋で、パリに住んでいた以外は芦屋に居たんですけれども、私にとって芦屋というのは、研究にとっても最適な街なんです。最近はやめているんですけど、私は毎日必ず1個ケーキを食べて記録していたのです。これをずっと絵の具で描いているんですけど、1年テーマ絞るんですね、今日持ってきたのは、パリにいたときのミルフィーユというケーキなんですけど、365日365店違うところで食べてるんですよ。1年やっているとこれぐらいになるんです。1年365、こんなことをずっと若いときはやっていて、研究を始めたのは芦屋なんです。ケーキの講演っていうのは、海外でもさせていただいたんですけど、これは芦屋に生まれなかったらできなかったなと。だから芦屋って街に感謝をしています。もう一つ、みんな芦屋の石って知っています？この芦屋っていう街は、実は、地産地消の街っていうことをご存知でした？芦屋の石ってピンク色なんです。一年中、石の中でお花見ができるっていうような石が、この辺りに転がってるんです。甲南高校のあの石垣もこの石ですよ。だから、地元でとれたもので、全部街を作った。山手にかけてこうだんだんになってるので、これを積まないで街をつくれないうんですけども、全部これ芦屋の石でつくっているんです。山崎先生はランドスケープの大家で、風景の先生でもあるので、先生から見て、この芦屋の風景の話も是非聞いてみたいと思います。こういう地元でとれたもので街ができています。田舎でない、地方でないという、都市であるにもかかわらず、こういう地元の石を積んで街を作ってるという意味で、風景のおいても非常に誇れるものがあるのかなと思っています。

山崎 ありがとうございます。じゃあ、課題みたいなものはなんかありますか。

三宅 最近非常に興味があるのが、外国人の方がたくさんお住まいで、特に、浜風の辺りがものすごい増えて、「こくさいひろば芦屋（浜風小学校）」では日本語が不自由な外国人の方に地元の方々が学習ボランティアでフィリピン、ブラジル、ペルー、インドネシア、ロシアの方々にサポートをされています。こういう外国人の方が増えている中で、非常に温かい街になってるっていうこともあり、実は芦屋っていうのは、いつの間にか南の方から世界都市化し

てるという動きがあって、世界の方々に集まっていただいて楽しく過ごせる。東山町で生まれ育ったので山手の方が詳しくはたんですけども、今は松浜町に住んでおり、逆に浜の方が結構面白いなと思っています。最近ガラッと生活が変わって、毎週週末は外国人の方と食事をしています。国際都市芦屋だからこそ国際的なことができています。パリに住んでいた時は、世界中から集まっている人と週末は食事をするっていう生活ができたんですが、芦屋でも、同じような生活ができるということは、これはこれからのチャンスかなという気がします。「こくさいひろば芦屋」では、ボランティアを募集するようです。今日たくさん高校生の方がいらっしゃるので、是非参加してください。「こくさいひろば芦屋」には、このあしや市民活動センターもサポートしていると思うんですけど、そういう団体がたくさん出てきていますので、外国人の方々と一緒に住むっていうまた一つの魅力が出てきてるのかなと思います。

山崎 ありがとうございます。このお三方とは今日初めてお会いしましてね、事前打合せも、ほとんど出来なかったです。僕がめっちゃギリギリに入ってしまったのでね。たいへん申し訳ないことしたなと思ったんですけど、まあこれは面白い 3 人の方に来ていただいたなと思いますね。まずは、三宅さんはポジティブですよ。課題ありますかって聞いたのに、課題になってなかったですものね。課題言い始めたのかなと、浜風のほうで外国人の子がいて、国際的になってきてって、ねえ、全部いい話になってきて、中田さんは、何がしたいんかわからへんなと、課題をきっちりあげてもらって、大森さんはもうこのままでいいやんという 3 人が、魅力、課題、そのままという、スタートラインとしては、すげえ面白い方に来ていただいたなという気がしますね。まちづくりを考えると、みなさんよくご存じの通りですけど、課題と魅力、みんなですべて共有してみよう、知らなかった課題も知らなかった魅力もあるので、まず、その課題を自分なりに考えればいいし、それから知らなかったけれど、こんな魅力もあるよという話し合いをしてもらうのもいいと思いますね。魅力をなるべく減じないように課題をどうやって克服していくのか。マイナスだった所をいい方向にもっていかうとして魅力のところが減じ

てしまっはしょうがないんで、こういう話し合いをしていきましょうということが多いんですよね。だから、あえて課題なんて耳の痛いことを言わなくてもいいんじゃないかと言われる方もおられると思いますが、少し課題をみんなで共有してみて、じゃあどう克服していくのというような話し合いをしていくことが多いですね。乗り越えるときはどうしても活性化の話になっちゃうことが多いので、そういう話だけでもないよという事を頭に置きながらこの後もう少し話を進めていただければというふうに思います。じゃあ中田さん、課題を挙げてもらったんですけど、魅力の部分はどんなところなんでしょうね。芦屋こんなところがいいなあとか。

中田 魅力はですね、奥池から車で浜まで走って、28分ぐらいで出てくるんですけど、浜風大橋を渡りまして南芦屋浜に行くと、30分無料の駐車場で、近くのコンビニでパンとジュースを買って、そこに座ってボーっといろんなことを考えたりしています。塩の匂いと海の匂いもすごくいいし、眺めがほんとに素晴らしくて、さすが芦屋やなと。そこは、大森さんがおっしゃったみたいに地方ではない芦屋は都市なんだというものも持っているし、磯の香りとか海もあるし、それからギイチギャラリーのある奥池町、さらにその北側には、山も自然もある。三宅さんがおっしゃったように地元の石や岩を取って、街を作ってきたという歴史もあるって事ですから、都市的な要素と自然的な要素と両方持ってるって言うのは、芦屋の強みだったり魅力だったりするんだろうなというふうに思いますね。

山崎 大森さんのように世界だったり東京だったりいろんなことに行けば行くほど、魅力を感じるようになるのかもしれない。高校生の皆さんはここで生まれて、ここで育ったということなら「これの何がすごいん？」という感じかもしれないですが、別の町に行けば行くほど「芦屋すげえ」的に思うところが出てくるかもと思いますね。

中田 付け加えたいんですけど、そうやって、私は芦屋の浜からいつも西宮市のほうへ戻るんですけど、西宮に入ったら「西宮なんやな」という感じの街並みになるんですね。芦屋は綺麗です。西宮は庶民の街やなといつも思います。でも、そこが好きなのかなのかもしれないんですけども、芦屋に色々思う

こともあって、後でまた、ちょっと言わせていただきたいこともあるんですけど、ここで生まれ育って、外に出た、大森監督とかは東京に出られてわかってらっしゃいますけど、本当に山も綺麗で建っている家もすごくおしゃれで、南フランスみたいな風景が広がっていてすごいなと思います。とても素晴らしい街だなと思います。

山崎 後で言わせてもらうって何回も出てきて、なんだか怖くなってきたんで、今言ってもらっていいですかね。

中田 言いたいことはですね、浜風の家のことなんですけども、来年の3月末で4月になったらその土地を更地にして返さないといけないんですね。建物を撤去しないといけないんですね。一回もしも時間があったら行ってみたいんですけど、奈良の十津川村の方から無償で提供してもらった丸太を組み上げまして、すごくいい感じの平屋の建物なんですけど、そこを無くすのはものすごく忍びないなという気持ちがあるんです。半分諦め、半分期待っていうのはあります。例えば、西宮市の仁川には地すべり資料館っていうのがあるんですね。神戸には、人と防災未来センターというのがあります。芦屋には建物的なものはないんじゃないかと思って色々調べたんです。思うんですけども、私の淡い期待なのですけど、建物はあると、土地を買ってもらえさえすれば、例えば、前の南芦屋浜の小学校を建てる、終わっちゃった話だけれど、投資されるはずのその中の1億円だけ欲しい、そこを買い取ってもらって建物はあから、そこに行けば震災の何かがわかるよというよなところにしてもらえないかなってすごく思うんですけど、いかがでしょうかね。

山崎 浜風の家だけではなくて、人々にとって思い入れのある建物であったりとか土地であったりとか自然であったりが壊れる可能性があるとか、変更される可能性があるというような場所が芦屋には他にも多分あるでしょう。芦屋だけの話じゃないですね、全国的にこんなふうには街を作っていく時に、ある人々たちにとってとても思い出があって可能性があって、これからもっと多くの人たちがそこを利用することによって良い効果があると考えられるかもしれない、ある人々は、そのことを知らなかったり無関心であったりする。こう

いう時に一体どうやって、その気持ちを擦り合わせていくのか、どうやって市民で、みんなでその話をしていくのか。このことについても、多分これからの芦屋を、行政、市長に任せておけばいいんだ、議会に任せておけばいいんだではないような、人々の話し合いというものが求められているんじゃないかなと思います。それを含めて後で、それぞれのテーブルでも、これからの芦屋のことについて考えようというときには、少し話し合っただければなという風に思います。

中田 もう一つ言い忘れたんですけど、芦屋のほうに震災の記念行事みたいな行事に、毎年行っておられますか？今だけの問題じゃなくて、やっぱり後の方にあんな酷いことがあったんだよ。怖いよということ伝えていかなければいけないので、それはしていかないといけません。それと皆さん「中皮腫」って病気は知っておられますか？知らないなんて…多いですね、実はですね「中皮腫」はアスベストが原因の病気なんですね。父は作家なんですけども、どこで吸ったかわからないのですが、それで亡くなりました。今は使われていないんですけども、使われていないアスベストがどこにあるかって言うと建物の中に埋まっているんですね。数十年前に建てられた建物に、私たちは包まれてるんです。そのままだったらいいんですけど、震災とか気温の変化とかで傷んできたものを壊しますよね、そしたら、そこでアスベストが出てくるんです。それを吸い込んだらしばらくは大丈夫なんですけど、数年後に発症する可能性があるんですよ、病気がね。発症してすぐなんですよ、1年から1年半とかで亡くなってしまふ。阪神大震災で瓦礫の撤去を40日間手伝った方で、毎年、毎年、中皮腫で亡くなってる方がどんどんどんどん増えてきてるんです。隣の隣のA市でクボタショックというのがあったんですけど、その時は建設関係の方、港湾関係の方とか、そういう関係の方だけの問題かと言われていたんです。1週間ほど前に「クローズアップ現代プラス」というので、見られた方もいらっしゃるかもしれませんが、今あるアスベストの恐怖ということで、昔の高齢者住宅に使われていたというのが出たんですけども、ご覧になった方はいらっしゃるでしょうか。（挙手あり）ありがとうございます。問題になっているんですけど、建物のアスベスト関連の疾患にな

る方が、これからますます増えていくだろうと、だから、皆で考えていかないといけない問題なんです。アスベストはいつ、どこで吸ったのかというのが話題になるんですけども、私が思うに、みんなアスベストを吸っています。100%ここにいる方みんな体内に持っています。それが出てくるか出てこないかは、神のみぞ知るだと思っております。大気中にあるんですね。「中皮腫」っていう病気は、そのアスベストが多い少ないに関係ないんです。何故か少なくとも出てくるんですね。そこが怖いところなので、みんなで考えていっていただけたらなと思います。芦屋だけに限らないんです。

山崎 ありがとうございます。さあ、大森さん色々出てきましたね。このままでもいいし、頑張りすぎないのも、僕は感覚として好きなんですけど、課題もありそうだし、どうお感じになりました？

大森 中田さんが全部おっしゃいました。率直に言ってそういうお話をしにきたんじゃない。このままでいいと言ったものの、今すごいショックを受けたのは「藤本義一」を知らないということで、わーって手を挙げたということは、これはこのままじゃいけないなと思いました。ほんとに「藤本義一」を知っておくべきだと思います。浜風の家のことをおっしゃってますが、要するにその問題ってみんな「藤本義一」を知らないからですよ。芦屋の力っていうのは、そういう文化とかそういうことなんですね。さっきこれで「いいやないか」っていうのは、要するにね、言葉としては「大人」っていうキーワードですね。「大人の街」っていうことであってほしいなということなんです。「藤本義一」を大人は知ってますよ。そういうレベルを上げていかなければ、「谷崎潤一郎」を知ってる？ 記念館あるんやで、「村上春樹」は知ってる？ もっとね「高級」なこと知ろうよ。知性とか教養とか豊かにしないと芦屋に住んでいる意味ないです。「白洲次郎」知ってる？ 「白洲次郎」って精道小学校卒業なんですよ。僕は芦屋に来て50年居ますけど、すごく背伸びさせてくれる街なんですよ。知らないって言うと、恥ずかしいということなんですよ。今、日本っていうのは幼稚化してきてるんですよ。見てください、政治。ガキみたいなのが政治家やっているわけですよ。それで、あほなことばかりしゃべって、大人だったらそんなこと言うたらいかんやろということ言っ

るわけです。僕らのやっている映画でも幼稚化して行って、ちょっと難しい映画みたらわからへんと言って、アニメとガキの恋愛もんばかり見てね。芦屋はそういうことじゃない「大人の街」であって欲しいなっていうふうに思うんです。今日、話す時にね、あれをやろう、これをやろうって、それで最後に、芦屋はこれをやろう、あれをやろうということが決まりましたみたいになるのではなくて、逆に言うとね、芦屋でやってはいけないことを出したらどうかと思うんですよね。一つはね看板はやってはいけないって言うてるんですよ。これは、いろいろ言う人いるけど、いいんじゃないかなと思います。ひとつくらいそういう街があってもいいんじゃないかな。じゃ僕が、ひとつやってはいけない事っていうのは「芦屋はゆるキャラを作らない」。日本中全部ゆるキャラを作っているのに、芦屋だけは作らないという、そういう提案。「芦屋ちゃん」とかね「あっしーくん」とかね、そういうのをつくっちゃダメですよ。市役所の前っていうのはね、銅像が建ってたんですよ。それが「大人の街」ですよ。「芦屋にあっしーくんを作らない」っていう、そういうのをいくつか出してください。今日は、日本中やっているんだけど芦屋はやっていないということを10個くらいだせばこの会議の意味があるんじゃないかと思いますよ。

山崎 これ、ちょっとその、この後のリードあしやさん予定してたプログラムがあったのかもしれませんがね、ない？大丈夫？じゃあ是非やったほうがいいと思いますね。芦屋が「大人の街」であるためにやってはいけない10のこと、みたいなね、そういうのを出すだけでも、何をやるべきかってことが、逆に見えて来るって事があると思いますし、万が一もしゆるキャラ的なものが芦屋にあるんだとすれば、大々的に卒業式みたいなやつをやるといいと思いますよ。芦屋はゆるキャラを卒業します！みたいなのを、芦屋はそういう街じゃないんですみたいなことをやっちゃってもいいかもしれない。B-1グルメとかも全国でやっているじゃないですか。

大森 やめたほうがいいですね。芦屋はB-1にグルメ参加しない。

山崎 参加しないとかね。

大森 そういうあれやらない、これやらない、シンガポールに行ったときに、Tシャツにやっちゃいけないことが書いてあるんです。

山崎 そうですか。

大森 煙草を吸ってはだめだとか、そういったことが…

山崎 いいなあ

大森 そういう芦屋でやってはいけない10のこと。B-1 グルメ不参加、いいじゃないですか。ゆるキャラをつくらない、遊技場をつくらない、いいじゃないですかね、あれだめ、これだめと。

山崎 看板の話とかは三宅さんにお聞きしてみたいなと思いますね。僕も景観を学んでたって、話をちょっと言っていただけましたけれども、三宅さんもそういうような、いろんな地域の食べ物だけじゃなくて、景観のことについても詳しい方で、日本の看板ってのは欧米の看板とちょっと違うのはですね、すごい単純なんですけど、日本には4種類の文字があるんですよ。ひらがなとカタカナと漢字とローマ字があるんです。このため、日本では看板を出すと縦とか横とか、でかかったり、ものすごいことになっちゃうんですよ。だから、日本は、欧米は出しているじゃないかって言われても、同じように出せない。アルファベットしかない国っていうのはですね、収まるんですよ。ところが日本では言いたいことがたくさんありすぎて、いろんな言葉が混じって来るので面積がでかくなってきちゃったりしますね。そういう意味で日本では欧米以上に、看板・景観条例というのをきっちり作っていくということが必要になる。20年ぐらい前から景観法ができて、制度的には整ってきていますので、先ほどの、してはならないことっていうのが、きっちりとはまれば、さらに芦屋を綺麗な街にしていくということ是可以するんだろうなという気がします。さあ、景観、看板、この辺りはどう考えますか。

三宅 外国人の方を案内することがあるんですけども、芦屋の看板っていうことで言うと、芦屋の街じたいが文化空間だっていう方がいらっしやいますね。例えば、この北側には業平橋という橋がかかっている、公光橋、伊勢町など、芦屋の地名とか住居の表示というのは、ほとんど文学からとっているんです。これ看板じたいが、非常に芦屋の芸術性を示しています、実は皆さんがいる

建物、フランス人がすっごい喜ぶ建築です。世界の建築の三大巨匠はフランク・ロイド・ライト、ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ、ル・コルビュジエ。実はこの世界三大巨匠の一人のフランク・ロイド・ライト本人の作品が山村邸です。ル・コルビュジエという建築家の西洋美術館（東京）が昨年世界遺産になりました。インド、フランス、スイス、日本にある彼の作品が全部世界遺産になったんですね。この建物はル・コルビュジエの愛弟子の作品なんですね。師匠の作風を表現してる建物です。芦屋市の公共建築ってというのは、市役所にしても、市民センターにしても実はル・コルビュジエの弟子の作品なんです。公共建築、地名、あるいは看板を作る時、全部文学的なものを使っているんですね。芦屋にかかっている橋というのは、地名もそうですけれども全て文学に関係があります。芦屋の魅力って先ほどから出てるように「大人」に会える、こういう人になりたいなっていう人に会えるということです。僕は芦屋で生まれ育って、今までそういう方に沢山お会いしたんですけども、実は、今でも全く変わっておらず、こないだ「情熱大陸」で出てた山崎さんがここにおられるとか、ゴジラの監督に会い、藤本義一さんのお嬢さんにお会いし、これはやっぱり芦屋の魅力だと思います。ちょっとひとつ聞いてみたいんですけど、海外で活躍された芸術家というのはたくさん芦屋から育っているわけですけども、甲南の生んだ世界的な人って誰？そういっぱいいますよね。甲南には記念館がありますよね。日本人で初めてベルリンフィルで指揮をした岸孝一さん。先ほど外国人の話をしましたけど、岸孝一さんは誰に音楽を習ったか知っていますか。ロシアの方々なんですね。ロシア革命の後、芦屋ってというのが音楽の街になったっていうのは、亡命してこられたロシアの方がたくさん住んだということもあります。去年ニューヨークの有名な美術館で、芦屋から始まった芸術活動の具体美術の個展・展覧会がニューヨークの美術館やフランスの美術館で行われているわけですね。いろんなところから集まってくる芸術家の人たちの力を借りながら芦屋で芸術が生まれ、いろんな人に来てもらって情報交換する。都市か地方かっていう時に一つの考えるきっかけというのは、いろんな人が入って来るって事が大事だと思います。ひとつだけ気になる課題と言えば、今せっ

かく外国人の方がたくさん芦屋に住まわれている中で、外国の方への学校でのいじめの問題ってということが広がっているということです。国際都市芦屋としては、これまでの芦屋の伝統も踏まえのこれからの創造ということに変えていくためにもいろんな方と出会える街になればと思います。

山崎 はい、ありがとうございます。三宅さんもすごい人ですよ、芦屋のことを全部わかってますよね。毎日ケーキ食べてはった人が隣に座ってますからね。こんな光栄なことはないなと思いますが、そろそろ時間になってきました。じゃあ、短い時間でしたが、今日話を聞いてみてそんな点もあったのかということもあると思いますので、感想とメッセージをいただければと思います。

大森 10 数年前、芦屋の美術博物館の存続の時に座長で座らせられ、その時に美術博物館の専門化志向、一部の人の志向で、市民に開放されていないことが問題になり、市民が参加し、市内の幼稚園の絵を展示することになりました。美術の専門家からは「美術館というのはそういうところではありません。美術館とは敷居の高いところですよ。」って言われた。それまでは具体美術を味わうものを一番持ってたわけですが、それまであった具体美術が芦屋から撤去されたんです。10 数年後にニューヨークの美術館で具体が評価されました。村上さんとかの作品が出た時に、近代美術館にあった具体美術の写真が出ました。しまったと思いましたね。あの時美博で具体を存続させていたら、ニューヨークで芦屋が育てた芸術だということがやれたのに。その時は、芦屋の美博から全て無くなっていた。それはある種苦い思い出です。芦屋の未来を考えようというときに、そんなことまで考えず、でも、そういう事あるんです。今、ここで我慢したら 10 年後、20 年後に評価されたりします。目先のことを考えてああだ、こうじゃなくて、10 年後、20 年後に価値のあるものは何かっていうことを考えて欲しいなと思います。

山崎 ありがとうございます。じゃあ中田さんお願いします。

中田 大森監督が言われたこともありますし、自分の市のいいところを発見しようと思ったら、外に出ていろいろ比較してみるのも大切だと思います。若い方は特に外に出る機会に、外の良いところ悪いところを見たら芦屋のいいところは

わかってくるんじゃないかなと思います。いっぱいいろんなことを見て体験して考えてください。

山崎 はい、ありがとうございます。じゃあ三宅さんお願いします。

三宅 今日こういう会に出席させてもらって若い人と話していると、まだまだ芦屋のことが伝わってないなっていうこともたくさんあるとわかりました。今日は、こんなことは知っているだろうということでも、芦屋には、こんな魅力があるっていうことを若い人が知る場にもなってほしいなと思います。芦屋という街は、わりと歴史は新しいのかもしれませんが、市民が作っていったという思いがあります。最近不思議に思うことは、隣の夙川と芦屋川を比べてみると、芦屋川って魚がたくさんいます。僕たちは、子供の時からこの芦屋川で釣りをして楽しんできたわけですけども、魚は元々それほどいかなかったんです。市民の方が、魚を増やそう、今日その活動されていた方もいらっしゃいますが、そういう芦屋に住んでこられた方が、いろんな活動をしてつくってきた街でもあるわけなんですね。市民の力で芦屋って街が、大森監督がおっしゃっていたような、何々をしないというような、他がやっているからということではなく、オリジナルな方向性をもって、静かにやってきた街だと思います。ひとつは、この場が芦屋を知ることになっていただければいいと思います。こういう会を続けることは大事だと感じました。特に若い人たちと一緒に、芦屋の文化を生んできた方、結構若い時からやっけてきている方と、そういったことも考えていきたいなと思います。

山崎 ありがとうございます。最後に三宅さんがおっしゃったようにこういう会を続けていくことが大切なことだなあと感じましたね。市民主体でこういう会を続けていく、僕はいろんな集落にお邪魔して、「年寄り講」の話聞いたことがあるんですけど、こりゃ面白いなと思ったんですけど、昔から「講」って、お金を貯めるためにと変換したこともあるんですが、元々、話をするってことなんですけど、昔、集落の高齢者、老人たちは物知りだったそうです。すげえ物知りで、若者たちに、お前らこんなこと知らんだろうというような話をされていたそうです。あれは実は裏があったそうなんです、年寄りしか行けない講っていうのがあって、より年寄りから新米年寄りに対して、い

ろんな知識がさずけられていたそうです。その地域のことだったりとか、今の日本の状況だったりとか。だから、年取れば勝手に物知りになるわけではぜんぜんなくて、何もインプットがない、学んでない年寄りが、いきなり偉そうにしゃべられるわけではないそうです。年寄りは年寄りなりに、実は勉強する仕組みがそれぞれの村々にあったそうです。どこに山菜が生えているとか、キノコがどこで取れるかっていったようなことも含めてですよ。そういうものを引き継いできたようですね。それが今インターネットとかでできるようになって、みんなスマホや Google とかで調べられるようになると、若い人たちのほうがいろいろ知っているような気になっているんだけど、今日、僕も知らないことをいっぱい教えてもらいましたけれども、実際に会って、学校の先生じゃないような人たちや、自分たちの高校の先生とか授業中の枠組みではないようなところで、芦屋の地元のことについていろいろな話をする。ざっくばらんに話ができるような場が、この芦屋にあり続ける事っていうのは、結構大切な事なのかなということを実感しましたね。それがまさに大森さんがおっしゃったように芦屋が「大人」でありつづけるために、必要なもののひとつなのかもしれないということが感じられました。「これでいい」ということは、「大人の言葉」なんじゃないのかなという気がしていますね。「これでいい」という言葉を僕なりに考えると、一回転するんですよ。何食べたいって言われたときに「うどんがいいです」って言葉があります。「うどんがいいです」っていうと少し消極的なんですよ。「うどんがいいですよ」って言うのを乗り越えると、「うどんがいいです」が「うどんがいいんだ」ということになってくるんじゃないか。芦屋でいい、このままでいいと言った時の「で」は、消極的な時の「で」でもなく、「が」を乗り越えた「で」なんだと思うんですよ。難しい話になってしまいました、「大人である」といった時に、「このままでいい」と自信をもって言えるためには、やっぱり、自分たちの地元のことをよく知っておく必要があるだろうし、こういう会を積み重ねていくことで、知識だけではなくて、いろんな友達や先輩や、知り合いを増やしていくことになっていくような気がしますね。今回、僕はこの席に座らせていただきましたが、とってもいい情報を得

ましたし、いい知り合いを作ることができました。この後の時間もワークシ
ョップの中、うろろらせて頂きますけれども、是非、僕も芦屋に住む人間
として皆さんとつながっていければいいなと思います。

最後にまったく個人的なことですけど、最初に「ベンツが好きな人が住んで
いる芦屋」と言われることに対する、その違和感は何かなと思ったんです。
先週まで僕ドイツにいたんですけどね。ベンツってドイツの車やんって。芦
屋でいっていうもので自慢して欲しいなと思う、なんか、その違和感とい
うもやもやが関係あったのではないかなということ、たくさんの情報を聞
きながら感じました。じゃあちょうど時間が来ましたので、このあたりで
我々のパートは終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。